

(8) 高次脳機能障害者のケアを担う家族の思い

～インタビュー調査の質的分析から～

医療福祉学研究科医療福祉学専攻博士後期課程 ○村上 佳子

医療福祉学研究科医療福祉学専攻 長崎 和則

【目的】

本研究では、高次脳機能障害者のケアを担う家族（以下、家族）に対する支援のあり方を検討していくため、家族の思いをインタビュー調査に基づく質的研究で明らかにすることを目的とする。

【方法】

インタビュー調査の結果を、質的データ分析法(佐藤 2021)を用いて分析を行った。インタビュー内容は、家族の状況とニーズについてである。対象者は、家族であり主介護者としての経験が10年以上ある方とした。現在分析を進めている2名の方について報告する。

本研究は、川崎医療福祉大学倫理審査委員会の承認(21-060)を得ている。

【結果】

家族の思いは、まず回復への期待から始まっていた。それは、医師から高次脳機能障害と診断され説明をうけても、少しずつ身体が回復していく様子から、脳も同じように回復すると信じる状況があった。そして、家族は退院後の生活を送る中で、過剰な責任を引き受けていくようになっていた。1つは、医療専門職からのアドバイスに基づき、愚直なまでに

取り組む姿であった。もう1つは、家族自身の内なる主体的な理由からであった。

そのような中で、高次脳機能障害の見えづらさや理解の困難さは、家族に孤独を強いていた。それは、介護に周囲を巻き込んでいけばよいという助言が通用しない、余裕がない状況であった。さらに、本人の目を見ることで、感情の変化に注意を向け、怒りのスイッチを入れない術を身に付けていた。

家族は、介護を担う中での様々な思いを、「亡くなっていたら」という原点に立ち戻り消化することを繰り返していた。

【考察】

以上の結果から、家族は、ケアを担う困難さの中で、「もし亡くなっていたら」という究極とも言える問いを自らに繰り返しながらケアを担っている状況が明らかとなった。

【まとめ】

今後は、家族の視点から、助けを求める余裕さえない家族にいかに関係を届けるか、障害の個性、個々の生活課題にフィットした支援の検討が必要である。